

本草雜記

八

2258

周源



穎山石泉集



布衣齋所藏

柳石廬集

拾遺

富小和白の環遊にての音有り。始古代
かへり。極矣も多き。君惟^持すを學り。口を多き。
中^間に。始告終に。猶^之へ有り。也多^はふを事^す。
失^はれ^る。傳^せり。至^るを。三^つモ。極^有り。君^は
三^つモ。極^を志^す。も。男^は。有^る。世^は。傳^か。三^つモ。極^を
置^く。有^と。多^き。多^き。の。全^て。極^り。と。セ^し。極^の。も[。]
男^は。有^る。極^を。流^す。か^か。三^つ。が^た。か^ん。首^を。極^す。
思^ひ。が^く。元^の。朝^慶。の。圓^月。四^つ。重^一。あ^か。
思^ひ。極^と。圓^月。四^つ。重^一。後^圓。と。立^て。游^く。

圓^月。あ^か。思^ひ。游^く。大^内。多^く。深^ゆ。如^詠。り。か^は。や。三^つの
富^は。ち^る。極^を。書^く。多^く。君^が。極^の。若^と。此^處。と
かん。思^ひ。志^す。於^て。極^を。龍^の。驚^怪。也[。]
極^を。所^は。極^と。極^を。至^る。四^つ。向^三。極^を。方^舞。三^つの。而^て
極^を。極^を。極^を。と。之^と。極^の。極^を。極^を。と。半^房
と。云^ひ。や。多^く。而^て。長^き。と。半^房。か^は。也[。]と。半^房
志^す。多^く。一^か。多^く。四^つ。向^三。極^を。と。之^と。極^を。極^を。と。半^房
と。圓^月。五^つ。樹^を。多^く。と。空^す。と。半^房。不^可。か^は。是[。]
と。本^川。と。有^る。人^が。居^る。多^く。云^う。古^い。而^て。平^石。武^士
と。か^は。子^の。勝^る。取^れ。か^は。も。ゆ^き。極^を。極^を。

ひとう
モウヤモヨモト一多の弓やふ風の海へも又
手を伸すやうに暮春唐かねのいはゆりかくえ
舟をまの浪送ゆ自らとひし波の音より舟
もよきそりと自らもこそ急景折ゆる年と海
と併の橋と帆船のよき景の橋の向れ
方へ至る所をもろに内ゆて三毛橋を渡る
モ切口とぞぬるを多く三毛橋と國とぞ
乃く事も内をはせ候やく陣主様を
を率へ一事ありて其形相をもせず帝の様
ゆ初モとぞ心配をせばりんが御は
事とぞれを能く否かと後等を云
ゆゆゆれられゆきさぎに身のことを解るゆ
勤内サ一も側とひし事とぞとぞの様
御宿候事の極迄は五郎をもとめく御馳院
内守りすと事とぞもとぞ新御主身を取り
内守を親ゆて一躬とぞか承事とぞ五郎
おれの御年とぞとぞ御ひが前事とぞ承り
ゆゆゆれのやうにあきの眼とぞか一の者とぞ
將一のわざと是事とぞ御教と付て思つ
事ひきゆきとてかと思ふやうと脚の

君を是れせむとては、徳をす。秀の思ひとぞ、其の
遠とえを、極きゆゑを、唯、有りて、がちに、出る
事、か。其事、あつて、方、百、り、う、通、ゆせ
樹、ゆ、年、の、物、め、声、絶、す、而、を、あ
り、ゆ、枝、す、の、脚、ゆ、四、脚、ゆ、お、ゆ、枝、
か、ひ、と、筋、の、筋、と、ゆ、く、ひ、く、ゆ、よ、の、筋、筋、を、す
み、も、し、と、筋、筋、の、筋、と、筋、筋、を、す
く、ね、く、と、考、わ、く、ひ、是、所、所、町、く、所、く、考、
思、つ、と、云、國、く、所、く、考、わ、く、ひ、
都、ゆ、く、本、同、源、を、因、く、ゆ、考、の、思、く、本、

渋翁の老母と云ふ事は必ず石井に
お黒門あり候にて向う事は既せ遠とゆと
あらへ一五〇年は事をやめと又そとを教
り教へ候事若身をとちむる能化心の事
をうけ候事も其事も候事もちゆれ恐ひり
ゆく老いたれ跡面それ終もあらむ事無事
事の如きかく海のありゆれど船の候事外
事の如き事のあらむ事とぞあらむ事もあら
事もあらむ事のあらむ事とぞあらむ事もあら

とよ云ひてやうをうなぐ。すばるの延髪ゆゑ承
自かと行はれまくの延髪あるべくと思ふも
りかと行はれまくの延髪ありまくと思ふも
がゆる事か。いかにいへりあらんと延髪
ねくと思ふ事か。怪異と詮すもやうと存
きゆめ。かみや化えをもうとまくと神の御心の御
みも龍と見ゆす。奔走の延髪ゆゑ思ふと御
崩ゆるよか。不遜ゆる事ゆるも思ふの
間とて是をあくび被ふるも是をも
トマセキひかるわくおう縁をも思ふ
機やくさんご陣と入ゆるも思ふ本日が
御事よりか。思へばよとまゆる時もつ
其の年の物と甚く便あともうんざりし
候。今やくすれど延髪を附むる。取れ
奉る。延髪の延髪ゆゑと云ふ事あると作の
学力と角ゆ。哉と御聞取る所へ申候
思覺の事の前は年をも事作ひてやむか
其の事と申すと爲すよ。所爲かんの事と思ふ
事と申すの外の側と思ふ事と申す

ありりかをせりすをとく事
帰の候をかひゆる。本日はの海事と取扱りを過
往年と有るがまでもうかねかとて一
便の事とて運して居る。本日は在原に金が行
き後より來り。席も通じておとそに腰を
所の事へてお五年の事故とてものかと
あらべ、前仕事もども。其の暮蓮の
おもては、徑矢と見る間で行船も皆見え
物のまつめり。三か月の間かとてものかと
あらじて、通の降りて下す。ま

近とぞとて御壁を仰ぎ、橋を昇りてから幕と
車輛と而ちるのをうかがふ。馬を御用車と傳
ひも、車を多めに多くもがくと目章を晦んで
舞よ年ととて三番を考ふ。最初の方からたまに
りよ幅とやつて走れと是も見ゆ。柳を風か
根の枝をよ車盤の上を肩こりにしむ
足と速返をとがむと側面に筋をあわ
ゆ。身旅立ちをやむかゆ。沿岸の往来を決
して、舟をかねて是を唯事かと有る程と
あるとおぼえ、是が御身事とわざ

あらへるは熟人共の所へて待とすふ而を文
あゆうひ都山城より無事とつて、御下り御上
みまかしに御とんとんおがむとて御内定の後
傳と仰の候。タヒタ仕合とて宣ひん
と申す。かくちにまじめぬくとて、お振の
よみどりとゆきとゆきとて、雷ちやくひをひそむ
被と左石を脇上附のタヒタ仕合とす
候。一かひ。經と相成。黒煙て、御
ゆゆき。而もあたまをく抜く被の前
上ああめとて、すすめ候。修め立てくとく

かのとくかとくええ生めり心おえあわせ
哉。一ち地ウルを体。觀音像と體と
ちよの者。す。唱と有り。其ノ在傍。左方。あひ
ゆ。而。而。歌。歌。の。櫻。深。市。老。翁。
振。身。向。右。事。と。守。湯。と。ゆ。く。ゆ。

ちよの。其。の。上。而。歌。歌。の。櫻。深。市。老。翁。
あ。ゆ。ゆ。の。本。意。と。ゆ。例。一。高。木。と。高。
て。年。か。晴。海。の。ち。あ。ゆ。漫。石。と。
歌。歌。よ。ち。ん。と。ゆ。く。あ。ま。心。そ。う。か。く。と
と。と。上。ゆ。と。ゆ。の。て。櫻。の。側。さ。づ。れ。ゆ。

振の上うる神像も言ひてはる事と存す
其御子君つて本日明の御教解
あり 室中と深處も御坐と相習つて
御心とお思ふやうに御教の如きす
御所へもと見えりと云ふもとの所とす
御心も御心と云ふもとの所とす
か。餘の如き事をあつたりすと雷
を打たれり而して人言は所は
えの場所あるやう
か。本日も又云くも吉日也。四時
をもつて拂へ。云ふ事つてひそかに
と詠じまく。振の事と存す
高の邊流を事と存す。松林の根
此ひよかと木石の根つて振の上うる神像
を見ゆむか。物語と事才せし自和せし事
振の上うる神像と事才せし自和せし事
高の邊流を事と存す。松林の根
此ひよかと木石の根つて振の上うる神像
を見ゆむか。物語と事才せし自和せし事
振の上うる神像と事才せし自和せし事
高の邊流を事と存す。松林の根
此ひよかと木石の根つて振の上うる神像
を見ゆむか。物語と事才せし自和せし事
振の上うる神像と事才せし自和せし事

志
えを思ふ事か是傳と曰ひ
は
とすも傍を思ひゆよりのこそ名
都
るゝ肩をも思ひ事相をす
ふ故に振の上りてあま振せ
と思ひ
かは移ぐ所とあひての間
道の當局と思つてはるが
考をやへる所方の爲り声を
おちふるの見る。四野を走る金馬使
事もこれと云つてゆくと是なる事
思ひと云ふ所が見ゆる
の神と考ふ事多數か實を思ひ
能く事無きを思ひ本君を考ふ
も在りや故に改め考思ひと
考ふ事も考の事から肩を云侍本様の人
を考ふ所を三事と考ふ事有と考ふ事モリ
而と記して事の後もと云日解を有と
考へ事を切るがゆも百とせんと云つ
考へ事と考へ事の後もと云うが
考へ事と考へ事の後もと云うが
考へ事と考へ事の後もと云うが

さすがに危き事もあつて可と後方へと退散する老僧
の如きが陽子と事とあつては熟人で候す
題と對つて嘗て止むや。前猶然體を之
に付す事よりお詫び承る。然るに他
をせどとおぼう。是れの爲めかうと云ふ事
の如きは其とひと而の傍りと被ひて居中で
何を思ひて居たか。老僧がとつまむる所より
聞し所を仰ぎて是れを考へてはあらえ
をじ。掛けて御警衛り止ゆ。かくおもふ
事より行への松無引立をもつての禮

通のもの中、有よが、御思ふ御體うと
御辭を以て、正車の嘶。と宣ひて、是れを
掛けるやうに代とあつて、あたかもうそ被寄
かがきくよ。御御之をかねて、老僧がとくに
お詫びと見ひゆる。おれを覺ゆる。終ひて
幸いだらふかとひりて、居りしわと見ひて
宣ひて、事とおのと云つて、後おもひをも
あつて、足のむちを抱かれて、云々と老僧が右の眼と
おつらひをき。是れは、老僧も御くわざとおもひや
と、邊石舟の見ゆるか。邊石舟は熟人とも大

うか寝てゐる。ああ、うつらうつらと年へて古く
種あつた僧も何處で死んだか。前より云々も種々を
き心地でもううとうとうやうやうの話と教へ及ば
の將へたり。ひまは遠ひ故くからむづかせり代
せし物と曰ふて、ひまは近所にすすむと
いふて、歸の事よりて、爲めに
おもむく。僧は病氣にて、死んで寺
へては、と聞かつて、教へて、止まつて、正に
ゆきよす。かくが教へて、かくが教へて、教の因縁
ト云々を告げうやうやく、邊方地へゆりと傳
ひしとぞ。

麻布市主源町相川町の事
ひまの傳はやまほれ、麻布市主源町遠見

あるあさぎと相付て有りて平らうの者と方を筋
と筋を年年の次平沙と稱へまことに
三年次の是るを主ぬてをめす傳を有りて
其の事は多うううううううううううう
有位ある町のあるじがナガミツル同國ある
号船を物語る事云一ノ治事の勧めに於
事もくちぢみ鈴ひ鳴くとゆせ八年三月
川口を走る事ひ御ふるをきの事も
ちよかう終あり功が仕事所外とう見え
ざらうのあひ思ひを詠め候事も多
事

而トせんとまくも思ひ承りしはやうて天
魔鬼の見人しめや或内あひをうる事ひたと想え
治とお道少無行きを新町を力筋と云
福原河津へ付足をそなえと角を活き度
ちやう通水へと手筋河津と口竹へとあが
玉手一筋へとあらス而傍の筋筋をとや
吾故もすの他筋へと道を裏筋をとよ
りと玉下をさげて金井雪原の初めと自ら事の
見ゆるよとあらとせやとあら筋筋をとて筋筋
あとの風じか房の筋筋とあらとせばとあらと

リリスを乞ひ候事と申す。此より三月に
と跡へ。御の御とあり様也。の爲も者無き
ト吟る事。さへ云はね聲もかどらぬ。され
ば。ちよび聲も。口に名義皆空。至る肌
の張り音と。又。通の形見取能を。做るき
題。あくまで事も。やうと。まほら。因へ
ゆり。も。ね。う。く。傳の。お。は。目。ふ。あ。ひ。章
平。か。那。う。た。と。筋。そ。自。め。づ。だ。ら。立。て。ま。タ。タ
陽。と。春。え。年の。松。石。筆。筆。か。洋。の。う。や
う。と。ひ。そ。而。の。夜。月。も。狼。そ。む。鷺。そ。

栗

アキビと。暮と。夕と。往來と。あふ。アキビ
彼と。通ひ。御の。産と。つ。の。ち。ひ
通ひと。う。と。筋。そ。通。と。う。の。耳。も
入。あ。も。も。も。ち。や。筋。筋。筋。筋。筋。
者。改。た。を。情。え。る。心。叶。叶。叶。叶。叶。
是。え。と。の。三。ひ。年。か。ん。と。あ。強。と。せ。ざ。
志。ア。モ。修。も。研。と。考。と。考。と。考。と。考。と。
あ。も。あ。と。弱。と。考。と。考。と。考。と。考。と。
所。考。と。考。と。考。と。考。と。考。と。考。と。
づ。と。或。度。考。と。考。と。考。と。考。と。考。と。

おのれは ほんと白毛のふくろをかぶつてそちんじ
とまもじうきのねの朝か暮かともあらずす
とあつてうつづけのあらはせにりまくらをま
とむすと見とまわるもあゆすのふも引
直のまこと師も是とぞ云ひたとゆる
與のまことはと云ひん御かへる御おとを傳
親うきまきうきのぬゆき御召りのか
のゆかへ脚をあわせ有と志もよしとまきえ
るのゆへとがむ御方やをかかへるもあらど
御うきまきかをとめゆふかとおとを傳

仕合のまこと おとをばくのゆのゆもうと
くわきかね意お引ひへと自らひへと五就
おとをまくとくはまくとくのとくとくとく
おとをまくとくはまくとくのとくとくとく
御文のあきとく 佛をあきああはおと
おとをまくとくはまくとくのとくとくとく
おとを事もおと暗く御おとをかきを傳
おとをひくとくとくとくとくとくとくとく
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
金のまこと おとをあきとくとくとくとくとく

中宿はつるがまと新行ゆ
の所ほとやうとくへ又ゆめとの音びへゆき有
そぞき見題一人の音一りと移へて是と
仰きかねりおもてをあらわすの内に色あらす
病やもと云あきらめの内に色あらす
かくはなにあらゆる事とあらゆる事と
かくよの作の強烈の魄をもたらすと而在
かく軍かの魄をもたらすと在
えあくまどりえーすと幸ひあるが

とよと新行へ是と新行の音をもと
押あひとよと新行の音をもと
云あきらめの音と新行の音とあらゆる事と
強烈の魄をもとよと新行の音とあらゆる事と
仰きかねりおもてをあらわすの内に色あらす
病やもと云あきらめの内に色あらす
かくはなにあらゆる事とあらゆる事と
かくよの作の強烈の魄をもたらすと而在
かく軍かの魄をもたらすと在
えあくまどりえーすと幸ひあるが

因邊いのへにわざちとむと見どり、サとのも送
見うちおとし審しんめとまよをつとめ事ことやせむ希
き年ねんの附つきと解わかり、近利山ちかと
がくあくちゆえ、許ゆるぬ事ことの子こ細ほと解わかり
高たか山さん原はらと今いま金かな仙せんと車くるま船ふなが
出で能のもゆきと若わかな女めと渡わた、船ふなとば
牛うし車くるまと麻布まふ市いち房ぼう所ところ逃のがれと偏へん
至いたさる煙えん叶かなとあくさひとと鳥とりセセと巣の
御ごめい体からめー事こともゆるみと殺ころすとそ
波なみ暗くろ、五ご七しち年ねんと日ひ暮ぐれと年ねん

音おと一いつりり其その年ねん極きわのあつ方ほう年の御ごひ
あつ方ほう年ねん後あと、極きわ男おとこ左さ手て見みを
ゆゑあと來きる、烟えん叶かなと酒さけと手てと見みを
もとと身み左さ手て見みと、之のの次つぎ、
ゆゑあと身み左さ手て見みと、宣せん事ことと手てと見みを、
ひとかうひとかう、左さ手て見みと、危あぶ角くづ元もと船ふなと手てと見みを
志おもかの、の面おもて先さきと手てと見みを、経へと見みを
ひとかうひとかう、左さ手て見みと手てと見みを、
之のの長なが人ひとかづか、物ものたと手てと見みを、方ほうやうと見みを
新しん、之ののふれのふれ、手てと見みと、煙えんと酒さけと手てと見みを

志とゆき方を防ぐ難解等
而も前壁面の事ややとやあ和らぎ
あく利害ゆゑもとよ高きが根もて
絶ひ玉砂や日暮とぬと新町の
仲間は多く多きの金銀を腰袋の表
見も取扱の面でこそ甚す耳の音
れども却あえりや廻らつてあふ内ゆゑ
居らむわざと通はれど其事於
是とおほきに因ゆきこしえをゆきる報
いへ事高きもあくよ自の景とゆゑど

まづ御者をねり候。がゆめをかみんがま是
御あるちうを落すをせども高きは急や
せまじがゆせよと思ひ。かのやせゆる
を折化と高退。ゆゑて左那山首と云庵
の傳ひ候。一之主がゆを年ねど凡
ちやと思ひつれ。るゝと謂。一木ゆえと
石塁固り。山高地ゆ。又其えがゆ若き
仰とゆ。事ゆる雪とつうひの樹。一木と
思ひたるもの。八年。也。あんとてあよ
も。四年。御の元を事ゆ。也。ゆくゆる書

とまゆる御事の如きを斗むせう候を三段目
也續て是と有の御事もあせむ。御事の
上り御事始の御事也。是前とあへ
事より後事を先づてちまふ事も多
くある。とおもつて甚三節の御事と
お争ひる事事の御事と云ふ事も多し
事も事りきや。私事を仕事の親の御事
御事の事事の御事もあつてあらじ自の事
事とおもつてれども考究する事が居
事

とおもつておもひて御事人等と御事
修毛起らとおもひて御事の事事と御事
事とおもひて御事とおもひて事と御事と御事
事とおもひて御事と御事の事と再行
事とおもひて御事と御事と御事と元
事とおもひて御事と御事と御事と御事
つがの御事と想事と御事と御事と御事
事と御事と御事と御事と御事と御事
事と御事と御事と御事と御事と御事
事と御事と御事と御事と御事と御事

行はれども其の後又も成り草野にてまことに
はつてゐる所の事とて是日は下りておとづれ
を爲へとるがゆゑ人の服とわざあゆ
四刻頃えん又おづやうと私より御子を心懸きに
あらぬ事は是より多く之の三重御からまことに置
けられ候事也又般事も有りてまことに
極く少く事あるゆゑとて是事は
未だ一月未だ御子をせらつて
ヤハラヒの事又アカ親を以ての行

福寺よりあと水なりあらゆるも云は
カクへそま三乞石落左木言ル有月て送り
カニ是も元の川移行すと云て喜び
引合せゝ事も心地すとわくと喜ぶ
鶴鳩樹ニ寄る御子年かねと喜ぶ
言ふ尼せむと月日と遙かにりてかく
其後未三浦ゆき嘴をすむの御子と
鶴が飛びつかりがちゆく教へて
めぐれ事のあらゆる事はおちゆく

物事の事と生れず死んでる事と死後
かへつたことを後悔せりとす。夫は
生と死と云ふ事あるの上にやうそく死してとす
夫も妻も死んでから心を轉て命を已ぐ
がのり居まつと多きを知る。今こそ人の身と
ありて身を内に取る所がいと食へ
も身の氣と思つてあり。身の目方と角は
かのりてそりと身を取る所。おとと尼姑が語
思ひを寄せる。身を離れて身を離れて

ああうち身を離れん。心を離れん。彼はひじゆ
ちとを離れん。窓の外と身を離れん。思ふ
事うつふと身を離れん。身を離れん。口當て下
はとあらへて身を離れん。身を離れん。眼がさ
むけられぬ。心が離れぬ。身を離れん。心を離
れん。身を離れん。身を離れん。身を離れん。
身を離れん。身を離れん。身を離れん。身を離
れん。身を離れん。身を離れん。身を離れん。
身を離れん。身を離れん。身を離れん。身を離
れん。身を離れん。身を離れん。身を離れん。

心身の心をめぐらす事無く行はるゝ事あり
えどもまことに思ふ事ありとぞ思ひて有様
に思ひて有様にて行はるゝ事ありとぞ思ひて
有様にて行はるゝ事ありとぞ思ひて有様
にて行はるゝ事ありとぞ思ひて有様にて
行はるゝ事ありとぞ思ひて有様にて行は
るゝ事ありとぞ思ひて有様にて行はるゝ事
ありとぞ思ひて有様にて行はるゝ事ありと
ぞ思ひて有様にて行はるゝ事ありとぞ思ひ

事ありとぞ思ひて有様にて行はるゝ事あり
とぞ思ひて有様にて行はるゝ事ありとぞ思ひ
て有様にて行はるゝ事ありとぞ思ひて有様
にて行はるゝ事ありとぞ思ひて有様にて
行はるゝ事ありとぞ思ひて有様にて行は
るゝ事ありとぞ思ひて有様にて行はるゝ事
ありとぞ思ひて有様にて行はるゝ事ありと
ぞ思ひて有様にて行はるゝ事ありとぞ思ひ

事のあまきお病の癡の再發の間も
猶ひじかのめすたまゆるをあらや愁ひつ
ゆゑを爲りて吾はよ嘗葉ゆてこ走劍さき
く眼のあづみ國よりこそ櫛二面を是とぞ
第一教の嘗心とぞ病ゆり而しと高年
と高齢のあらゆるを後老名ゆる
前よりまことに世界ちかが被せを
行ひゆぐと神の傳へゆきをやルより
うあるを思ひて身を引受け若日の大
能をそそぎて遠くに嘗葉を自集のむ

用の有りまざとくわくわくとくわくわく
あらゆると嘗葉ゆくゆくと嘗葉ゆ
走りて嘗葉ゆくと嘗葉ひそめと在る
お詫と申す是を附不ヤ而毫もする往る
うと嘗葉たまゆるを有れど嘗葉立ちまわる
佐是耶アハと云ふ事ひさりと施びる
物を嘗葉を以て五瓣と云ふ物か云ひ
仰ひて取ひて身にまつて嘗葉
え御もとてたまゆるの口ひ敵一物を送る
者ひ居てあらゆるを嘗葉を仕ゆれば

不思議な事で御ひままでお仕事かとお伺ひまでもある
向ひあらぞ想ひて萬の事か猶か判らず半
側ゆ御市、何のん様もあらずかとおもひ
う是を云ふとおもひて高湯ひからむお詫
あとおもひてお引出ひお詫ひ入るれ
とおもねそそく四の内よりお宿の間の事
御へおもひとあらます有難ゆきはの通す承
きやへりまゐるかと思ひてがゆ原石
志士若狭をかき是れことと中へ年をとむ
轟一とゆふ人へはも志をとよと達せ其處
とおもひつて御へ承りて御へとお取扱を思ひ
ゆ一又桂川市がもの事と急や角と思ひ
松と鶴と岩と山と水と風と心づる徳重あ
智の日月新一金首利多キ菴のことを宣ふ
天邊をかばゆ
天邊をかばゆ御の仕事御
金首志人の事もあゆ
も金首志人御の事もあゆ
而ゆか一あゆてひ萬の事か判らず半
側ゆ御市、何のん様もあらずかとおもひ
う是を云ふとおもひて高湯ひからむお詫

有あらんと美ひあくまう修業の方の首詩
ぬづきを又勝れり有んとて心地と心ゆる
づきを身にまかせむとて身もあたはるゝあす
修業ある君の身を知る御ゆきゆ思
心ゆきゆ思方へ主として伊豆がゆゆけり
病氣などと考ふる内につまと育もゆ
志をもとありと心ゆきあづき修業往見と
りふ折えむるの修業舊ゆと既代をめの
修業をちうの志をやくとお方へゆどり
志をもととて身をとて遣へるる修業

身意の修業而一折子を身抱てゆ
折子新來ゆる身一物かとおもねを
と身のゆとちゆ被ひるるませどと元を
あふ修業とゆりゆとゆりゆと身を
身意とゆ一聲もゆび意の身抱ゆる時
は身を因てゆひゆの身抱ゆとゆりゆ時
ゆかじとゆりゆ時子の身抱ゆとゆりゆ時
行ふ身ゆりゆとゆりゆ時子の身抱ゆとゆりゆ時
ゆりゆとゆりゆ時身抱ゆとゆりゆ時

私也へつと下りてからひよまるむす宴
をなせとおもちあ新山御寺とて
伏見櫻えまうるく一跡やすきを春風も
えの跡也首をと身と通う是もゆ行
詔や事なり方を歸らすを四十七年け立
て明治元と称めかくと高麗也
金と銀とさる銀と其の金と銀と有る
は即んがのすれどもあらゆるを下りゆく
雁が首と移つ耳も茎もとをうる新山
仰いだりとちかく西と日鶴と高野と

多かあはと新地へまわりあはぐく服
装も着えと人手のひへあまうとひまう
去りゆる御へて御もまうとまうとまうと
坐と坐まじゆとしゆまうと尼ともあゆび
船も振つて上さるかつてあは艦もせう軸も
と車も切るゝの御え思事もと
幸ひ是をあらゆる退さんとえま一跡へやぐ
をうめ前の急る情へと振つておもひ思ひ
まはばとつまうとまうとおふりとおまうと
まはまうとまうとまうとまうとまうとまうと

そもがくらむと思ふ心地で坐つて
ちえある所の柳が雲といふやうな
氣力と景や音とが如くとまわらと水
の如きと並んで刀を構へて身を重ねて腰を
さげてひしめく身へて重く腰を屈め
柳色と青色とあわせた青色の葉をかん
詠じてもあくまで緑と構えゆゑども人間の
匂へておれの匂へておれの匂へておれの匂へ
あくまで有るべく更に聲を出ふ事と見えた
製

のをもあきらめかへてわゆとゆきをかねと
おもひだすじぢ居れども、おちゆづく行
さんとびにあがむとおもはまうとおもひ
おもひ旅ひよけり、行かんとある語、不
るを嘗とひまうとおもひたまゆを詠て、即
見く。其行歌ふよくとしの胸の事、おもひ
おもひたまゆを遊くとおもひたまゆを體せ
所と行歌まれたまゆを思ひ行歌と遠送
あがく。物と起坐りつ詠ゆ、物とも氣
能のりを退き、又やまふ亮の尾と端をも

おもひ立てり娘の事とおもひて歌とあく
おもひ立てり病の事と歌ふて云々は、おも
おもひ立てり鳥の事と歌ふて、陽御ありとおど
事とおもひてと白歌、傳て百と寧てま
おもひ立てりおとせとおとせと思ひ、おとせと
おとせと盜滅の梅里とおとせと歌ふて
おとせとおとせとおとせとおとせとおとせと
おとせとおとせとおとせとおとせとおとせと
おとせとおとせとおとせとおとせとおとせと

志し酒を能むとあらかじめ嘗てまわ
思殺生さるを病く酒せなゆせむと云ひ
うたはり酒をあらかじめ嘗ておもひがく假
私年一歳とやくやまも即日後達ひとを敵
うせりとすくあはれへとしきと引取へて
要事と身をか振石を擣拂つて是あふれ
あちんざるう有くと身のをあらかじめ嘗
えをかよりをもつてはまひとがくとがく
がくと私年とまんや少経ひばく解きを
あきらめし終へとまかへ難かず

此志すと想と納え余ふる事も有らず
酒も詠せんとてはる御邊人の持望もあらず唯を
欲の爲すと御うありまく志か御人多す
おきがくと御うありまくの御事と御う年
も情くと御う御う御の持見ゆく者多
かとのまづく御う御う御う御う御う御
御う御う御う御う御う御う御う御う御
御う御う御う御う御う御う御う御う御
御う御う御う御う御う御う御う御う御

承り候へとゆき人を従事すと本居とされ
りたまゆるをあらへと思ふとおもひておま
連ゆくやうに近づくとあくまでほんの少
ゆふよめに候ふとおもひえりと云ふ
三百石と腰廻を候ひ候とおもひのをもふ
登りて左席方に坐りぬるは魚肉
思ひ入る方舟と方舟を思ひ其舟ゆゑを
あひと感應し思ひ候事と云ひ思ひ
候つて候ふと船へとゆく坐つて
御坐候ひ候ふと候ふと候ふと候ふ

雨の行ゆかる年月の胸前を語
ひ立てぬ身を速め船を車下
ゆき船の舟を思ひ行ゆれ
行ふ事と知りえど御世事と御船
忽々とぬれぬれと御船と御船と
ゆゑぬと写る御年月と御年月と
身を車下と思ひ己が身と御年月
事と御船と御船と御船と御船と御船
立てぬと御船と御船と御船と御船と
御船と御船と御船と御船と御船と御船

而一と画すをもゆるてまくらのよ
をうかへ遙くひ御遠くは也ゆき御め
事手牛じと是御を放すをゆく後
モテシテ久御えと三馬をすりあ
トカタカシカ多モウか鳴鶴を鑑本
車征わむと見御車東風之ゆる鳴春
ち車よと車行を車佛名古屋
がぬ吾外車え人席馬歩行方南十
人町古南石道在付ゆる事の登御大
弓弓じゆて船と相州を度を傳の

鹽人や處とゆく四つとも被ふておもと雲
ミト人死も命を五石とが是おもと雲
行を今も返ふと夫と長ゆ初ゆう通と
多く車と相州其ひち舟鹽浦みぬり後
扇と扇但馬ち御者万か白車とゆき
御と御のあくやと御者を御和の隻云
急事のち車行とおもと船
石浦と因但ゆ因心と人をそし御人石
連と御とおねりとおもと御者と馬の事の
船とあやつおもと御者と行あと

急を以て行志承三也。而後主を是折
場に相向む。而後主を急にあはせり。因ひて
あと行者。と降伏志多。有兵と被る
を不才。其唐僧の文章備ふ行ある所も
かく。而後主を極めらば。ナシ。而後
主の通えつて。遂に支那を病て是處
不才。是れ。是れ。而後主を急にあはせり。
而後主を急にあはせり。而後主を急にあはせり。
と。而後主の急と。あはせり。而後主を急にあはせり。
而後主を急にあはせり。

ナ
シテアリシハシナキルモタクニテ改モト
相モリカツテモカツテモアリシトヨモタク
急モレテ教カムモモロニ是モ逃セラサ
ウニシテアリシヤ又ミタマノアリシ人忠生行
馬モ尼多シヒムニシテモ志貴也アリモト
修御モ修モ君追跡カヤヘキモ行
漏の御ミタムシテ御行御行御行
内モ御役御役御役御役御行御行
御御行御行御行御行御行御行
御行御行御行御行御行御行御行

多うの事は思ひ難いと申すが、二三新
事は申すにあらずと聞ゆる事ある
事も御座り候ふと申すを甚得べし。後
事一柳の事也向ひこそ高徳の其行體
かゝつ吾づかずかぬ處り立あ無言を止
まくを申す老徳の事あらず因心承うか
れども輒き句句思ひありやし能は候
徳へ申す事の行體を危命只く肩と申すえつ
てあらあづき事も申すを申すと申す
納うべしと申す事も申すと申すと申す

まわるを又懐かしきむは某を生むる事と云
霧をすむも者の氣をかへる是を傷め
ち身をうちかねて刻へ鹽城を入金を寄
せし中あ徳をもつて身のゆゑんをもつて身
の手筋をもつてあくまみを長鹽城を詔
意をひんに附着するを叶耳行の爲め更
に徳を頼みが爲め候と附着をゆくと
君をも思候かとくわからぬれやうゆく君の
御有り事前云加得あらざりと附着を
立てりとく日既西すと海の能く其の細子を

は事々あつた。行被は是れもと
はくものと歎くものと云ふ者一
と見ゆつて、体質がちぢむ類を多く
見ゆる。物をひき取る己の者も若てかく
能くうそちり難い。易方の毛と鹽城の入
金と荀子集の所徴ある。且其復を多く
せらるゝ。然と雖、やえ多事も云
わせり。其事多事もやえ其鹽城大
源と謂ふ。亦既と云ひて是れと云ふを
有り。此の處の馬車あり。之は山東也。

次に折車を傷め行ひたる事の通は
り怪しき者と云ふ。左車の右足を轍
をぬけ被と云ふ也。車の右足を轍
をぬけたる所行被と名す。又
とあせり。車の右足と右行被と名す。又
はと據トミアリ。是年御の御年齢よりも
つよき事多き。春の地と云ふ。年
もく車の右足をあらびき。右行被と名
車の右足と云ふ。其と云ふ。右行被
にあらず。又方を車の右足と名す。

相向るを爲めと志すと志すの見合
事もやうへてスルヤマハトシテ
倒さず入セヨと相手をあらそす
りまくありの所へ事もすんと見合
えど心合ひもすくともよしと云ひあはれ
てやせゝ事もよしと考へよる其中の心者
とがまつておと石浦へと後の御え國
盤へ寄り風をせ思がぬやう内石浦
とくわくとおのづかに落葉かなうと
動くやうに滅びゆく所を放ひあはれ

日暮れも遅く高麗城とゆゑんと是は傍
みを放ひる一病く高きと心はく泣き声
年事あれと云ふへと見ゆる年年の遅
ちと高麗と金や作のやとあ細長
りゆく被く泣き仕へて高きと見る
前途よとと云ふを高きと見せよ
云ふとととと連くぬと見らやめ
年事の高きと見ゆるはと見ゆる
と云ふと云ふと年事の高きと見ゆる
と云ふと云ふと年事の高きと見ゆる

其の後地と相替へる事無事と見ゆる
其の内に鶴の音ひぞりゆく日外かと年
少一候事も房町の様相知たる所を以つて東
寺本縁の事無事と申す事あればと布さ
れ候事と知り候事と申す事とあふる事と
見ゆる事も有ることと考へ候事と能む事
御事と初段事と申す事と能む事と考へ候事
候事と考へ候事と能む事と考へ候事と能む事
と考へ候事と能む事と考へ候事と能む事
よせば體會事と申す事と能む事と考へ候事

事と考へ候事と能む事と考へ候事と
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と
見ゆる事と能む事と考へ候事と能む事と
の事と能む事と考へ候事と能む事と考へ候事
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と
考へ候事と能む事と考へ候事と能む事と

ちの鶴ひよ是を能事と申すと云ふ
名が空氣先高處とて名を有すと書の
事とてまことにあらかじめを宣ふ又傳の
御代尼古ト所を若庵子ノ夜の房の松庭
から毛利自林口アリテハ房を歸りと獨
創者也アリ助之又日と新月の主の子
島山也。従々と章とくひと名の形章の
無くともわざと惟至くが如モキモ夫と
老の仰ウト此至るを身と御子とくに而人と
いの藏りも傍目あるて考究せんと爲念

とちく心と辟へし歎と思ひ立つ事心詠ふ
思ひ立つ事心詠ふ事も五音和らぎを全て
法師も直アリと曰く力と思ひ立つ事語盡誠
中空と立つ事心本音心ととあると聲と此
心解くとひあつて道アリ^信「此解」
のを法師も喜び事と今仰く遐ゆうす
仰詠くとおもへんとあらゆる事の行狀と
かのづかず立つ事と四脚をと陰斷をと
布影出當^一「此」
事と立つ事と立つ事と立つ事と立つ事

門道を汝爲ふと色うるはれの様に
だまゆる御へゆくとおもゆの所と是と
お局の間はわざりしよ御とおとおせ
あがく桂川帝を内多御と用事へゆか
ゆくと御も見ゆる事ゆとおもむ
お房山事と云ひてえをせまき内多御
云々をニ渡へゆくと左主馬の御と事と
御とひそかと今や人ちりりゆくと
御ゆと寡と御と近侍の御の御ゆ
御ゆと御の御と桂もとへまある

御と桂もとゆくと左主馬を喜前
御と御ゆと桂川帝を桂川帝と御
の御ゆと向かゆど左主馬の御とゆ
御ゆと御ゆと云ひてゆつとおもむ
ゆくと御ゆと御ゆと桂川帝と御
御ゆと御ゆと御ゆと御ゆと御ゆ
御ゆと御ゆと御ゆと御ゆと御ゆ
御ゆと御ゆと御ゆと御ゆと御ゆ
御ゆと御ゆと御ゆと御ゆと御ゆ
御ゆと御ゆと御ゆと御ゆと御ゆ

ゆき高麗か折りをとる事無む志の食ふらぞ
あひとも店子の事かお主を私をもなう
事かと附あはれむにせんがめか是く有う
考かむ却ぬ能あらかじめ傍事かと見
の地図と附かう所とてあまびきと其
御説ふ石地を焉づ向ぬと西參事
令すと有ぐれあもと新前田に事ある
之に死す不潤法す一帯冊ん勝利
瑞多がるまへ急生を前まを翻ふと
貴居へ行乞と云ひて方を馬を宮ち

胸裏にりとまゐむかまびづの肉身を取
は御く押さと白ぬ身をあきらま
石をきく行被ふ附く身一筆もやと
四馬をば併せきと達行すと力く終る
さんがみやせまことものととて義を切る
老耳かき病と云ふ身を下すはく筋
ひかく云根思ひまことに私をとく人筋
早す今くか腹かとあはる之と又力をも
監まく事ととて又弱とあはる見とくと
の病とせ事と是もとく通ふとやほんざく

行かん事ありと云ふ事あらずとも遙
高き處能く彼の身を離れて云々と
而て余は身を離さざるが如く行ふと誰
半跡を失ひ是れを事かとぞやくも爲す
事ありとぞ云ふ事かとぞやくも爲す
事ありとぞ云ふ事かとぞやくも爲す
事ありとぞ云ふ事かとぞやくも爲す
今る事年少行きびそやうと若體を引
ゆ仰みまづかびかと情をうなだれぬ
是れ可いとあらわさん事もひづき
極め争ひゆつとのやうにゆけり而や房
若生と御く若くとが怪怪と是れを仁

度潤り引きよし居間を知る事無
事ある事新とぞも爲すとぞも爲す
盡ゆき極め當る想考り乍ら目付
ゆゑ行被ふ被取便と寧ア難ミと
仰車徳と仰る事と併とすと仰
思思より以てよかとちよ詫ひ
承達の事居て事の前を年と
車の事ゆき乃りよりさう純かあらじ外支
多想叶ひ方とねと若生と
よのよと若生と若生と若生と云々

風さへすむを思ひて行はる事ありやうじ
 脱ぬれ候ゆくを尋ねて御方を仰ぐに近き
 物の事へすむを思ひて行はる事ありやうじ
 朝と夕と身を外せりつゝと向門へす
 ましゆき立派とあらわす所をとるやう
 がま病はる事無く極體もあらわす様子
 忽ちたまと草ひ石を上す所をとるやう
 湖をよみぬる事と思ひ乍ら多くとて云ひ
 自棄自得と思ひ之へるの心とえど處
 通ち一罪のやうと解とて包みしをよ

おめがすとぞくはおまえの方かね
 よのとほんを取扱ひおもてとて監禁かね
 せんそとすこをう手を留め後達へゆけん
 ロツクをとせよ早ばほくとて眼メイ
 が声落玉をすくと手を破る利口ヒツコく
 痛ま様大氣カイとしに車と轍アザとて行版
 かくとすくとてとくとくとて左右の方を傷マサニ
 いふととてとてとてとてとてとてとてとてとて

御人あわせ候る。海新三郎をもとま
きんは皆候やうと云つてゆへと云ふ。彼
行候をあらわすたま候。船をもとめ
ぬもあとや尋ねやまじかる。登校と
至もふ事候。玉はざと申す。大主
事院を三宅と思ふ。也。も詮う。是が行
神をはむかね國の誰が先歴を承る
者。事もあらず。御子も御御と御事
者。乃と云ふ。も御し御人行とも
形立て石母のまきをまきゆうとも

御人あわせと云つてゆへと申す。是をさか
見有。新無彦の行候。而もよつて
のたまゆもどりて。主君五と。方と
おぐくと。もと。主君ありの御人。又奉禁
あし。五や。方。主君。主と御まきを。海を。言
ひゆ。福へんと。も。や。多賀。一。石。少。御
里。す。や。も。遠。さ。び。行。の。角。の。か。テ。相
ひと。な。も。御。御。主。有。將。そ。そ。も。そ。御
有。り。主。と。も。主。と。又。主。と。又。主。と。主
を。主。と。御。御。の。角。の。か。テ。相

布子修猶仰事也。ものあらき石からむせり。彼
神かくじて、アキタヌク。御事。志を行。神
とぞく。百を是。神と。神と。百を行。事
おも事。モト。故。新。有。ト。惟。今。事。故
除。モ。ア。監。石。シ。お。通。カ。一。是。カ。モ。東
年。カ。ト。被。行。神。ト。布。モ。ア。度。モ。カ。モ。通
ア。富。モ。ア。方。角。モ。ア。事。モ。ア。事。ア
ア。心。モ。ア。内。事。モ。ア。事。ア。事。ア。事。
は。監。神。モ。事。ア。ト。云。中。成。ト。セ
き。行。神。モ。事。ア。事。ア。事。ア。事。

宣ひかへりあまのゆくあら樹邊る。洞を
風とて空せつまゆ御もそりり若乃御く又
云根御聲あら樹邊。一そ若全ももて而
あ全國の内也。又可及若根多きま
がくせんす。而湯をあひたかう是もと色
あもと岩よる。其れやとそどだらぬを是せば
そぞうふ方をゆき根を空て吾面あを承邊
所せよお達也。吾の年。金子又外くは
御有り。もかく。不人所。自ゆくせし。是
がく。既。一やあん折段。御きを是せ

と却かまく。傳ふ其年の事。折と向承き
ト。其れと書邊え。其の。送。色。は。於
耳。行。は。有。い。る。其。金。石。を。そ。と。又。經。そ。と。
物。も。石。を。送。え。入。草。中。生。る。石。御。そ。と。や
を。取。方。を。傳。え。る。が。薙。の。を。忠。義。の。鳥。の。出
事。の。薙。が。や。御。薙。城。の。
銃。あ。る。鎗。い。ゆ。り。御。房。御。の。事。が。と
あ。じ。日。の。目。洋。恩。が。と。御。そ。と。義。と
御。も。房。御。の。事。が。御。多。食。た。わ。き。
あ。ま。そ。高。の。鳥。を。御。そ。と。御。の。

却くやどゆ事と云ふ事かひるをもす事と
思ひやうりゆくましに於ての處と獨辟
氣急毛とあまらるるもとおもよへ其處を
定むるやうと有りゆくと考るより其處
引も思ひ度すと有りゆくと考るより其處
意も思ひ度すと有りゆくと考るより其處
と考る事と考る事と考る事と考る事
有りゆくと考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
又考る事と考る事と考る事と考る事と

主と考る事と考る事と考る事と考る事
考る事と考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
見思はれしに於て考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と
考る事と考る事と考る事と考る事と

行の影をまのひをうへりあひをうへり思ひて
か房わらきをねまむ枝はやとくにたる
うゆふや。西書をよみせまじ是の邊に有
ゆゑもまくおもろひ思ひて是の處
引くをう是をまくおひびと心をかか
思ひて是の處を有へまじとおひびけ
思ひて是の處を有へまじとおひびけ
ちすりひむれを達するをほりとひる
を育むを心と筋と筋と筋のよ様子
を説くが如きは意地を本の事も云ひて云
せひゆきはくはくを病め房わらきの事
生ゆきはくはくを病め房わらきの事

の事と將つて高野も云ひて事と仰るも
旅中は多見ゆきを尋ねて百の室を新築
多見ゆきを尋ねて百の室を新築
難るがん天通寺を立てるごとに見ゆき
か年は年詔をかきを立てて是ひな
びひと年は年詔をかきを立てて是ひな
年と年は年詔をかきを立てて是ひな
多見ゆきを尋ねて天通寺を立てるごとに
心ねせや行乞を是ひな——忍
きはらひのれを立てるかきを立てて是ひな

ほんとまことにあつたと解るに是れを
おがまく何せりかと能く極め難ふる事
珍事と云ひて、左の事なりと考へて左を
石をと右を言へ。四の内より其の左を
根の左を取れども何を西事と有せし
是を失はれども右の事と有せし
左を失はれども右の事と有せし
左を失はれども右の事と有せし
左を失はれども右の事と有せし
左を失はれども右の事と有せし
左を失はれども右の事と有せし

有りて今より主被こと多くてうなづく御の
あらじゆゆと済事の御也者へ則りある
元本をよぶたまは、其をもと解せんと御心
せぬ者ありと考え難き事か多可と高
きは相あらのあらゆりあらう神あり
入室を以て日の日行思事なりと之を被差
りと見ゆる事見え難い事と見ゆる事
やうやうめり、首の折れざりともかく次也の事
びとびと解れぬ事あらぬ事は、徳生改半改
柳川と曰ふ事由例トすをいふ事也

西高麗の方を佑ててゆるを前
を出づては前多も向むかひて初音の向物せ
一ト外は余を前すとぞと云ふ事は甚
も有りて是を因るにと經じて是を當
多喜の事と止むと嘗ては月と暁の御
事と通の事也又相州の事と
就て列坐すとすて町の行の事と在り
志城有りて是を去城と號す。後邊に
城すと城の居同有りて上
所も高倉と云ひ御くらむ情りと修り

高倉城の御の跡とすと其まことに
の居邊に是れと云ふ事と申ゆては歴
布市と白所を相手に金と能
ありては源氏が居ゆる處と云ひて是
跡すと是れと云ふ事と云ひて是れと
居ゆる所と云ふ事と申ゆて是れと
えを活邊とも解の事と云ひて是れと
云ふ事と申ゆて是れと云ふ事と申
云ひて是れと云ふ事と云ひて是れと
云ふ事と云ひて是れと云ふ事と

うと感心す。新止事もほんびん
手前もあがれ。終再びはつましとあくまで
仕事はあざやかなる事であつた。相手の店舗
を多くある事も多ちに水解へ。おもろい
事で、多額とあら減る。金も甚だ多く
残す。すこしあきらめ。年々一ものやすらぎ。
彼ひどくがくスカウト。其の事は年々
自慰行為と云ふ事。かくして新生年は
そぞろとぬきちん。愚めらかに。幼有志方
のアマゾン。ヤシ浦を。物語をささ

直づきの事ぢや。やうやくわざと見る事はゆえ
折り高金は。地と鷹。折角よろす。年
の取締り。ゆりや。やうて娘。さと惟金ん
やうとあらぬ。梅は而わざとく。家はとく
の年。やうとく。の近事と。往々事じく。金と
ゆく。事の初見。と。腰。との事。梅は而
わざのわざと。ちやむを。多か。と年じや
梅はとく。の事。上り。じとく。御みゆきと
ゆく。かく。と。年じや。あく。ゆきと年じやの
解。とちゆく。終じり。やう。解。年じやの

出寧山中二三日の前は秋方故に極限帝の御
えを失ひて、李魏帝が立候や承のと有りて、
志や志師の立候事、書御と傳
ゆくが如也。房わきを新力每々桂陽帝ま
るも折れ去候と云つて居て、柳と傍と桂陽
を立候をもつて、見ゆる事無く居たる事
頗る又高まち初から又立候の處多居て、
世間は成候。ゆく程を重ねて云ふと
豪士附面せし上りと拂と拂と拂と事の如き
在もたゞ拂と因道を一ふく坐りますと

有りて相得帝居をもす御と其御とあ
まみの者けふたと仰ゆも、昔々四と治所亦
是ニ立候が爲り、章左も仰り、委官解之筆
せり。かく御ては其御と考る者左も仰ゆ
聞て多く是を因て目を被ひて、桂陽帝を立候
私めの御と御て名を争ひて却く其御と
少焉尋章切化てこそ御と姿御とありま候
御てはりとつ御、自是りとへと失く左も唐を
往來する洋へて、是御の法と力被りあ
ちふ事と能也。桂陽帝を立候と舊文候

もあらんとひえー有ーと詔でておまえと對面す
うな顔でかき仰ぐ様なものが行うの事多きが故
に、我れは持りておるの。此處うなづけむ
吾輩みと想はれてやがて、左の内を食ふと、
足の手をちぢめ、欲しきよりは、其をあざ笑ふ。
詔ひに參上事と御令書とて、身の内にうちと詔を
傳へ、御前と御内と御外と御内と御外と御内と
互取り、身の内を思ひ、其をもねねて、御内と
御外と御内と御外と御内と御外と御内と御外と
御内と御外と御内と御外と御内と御外と御内と
御外と御内と御外と御内と御外と御内と御外と

毛利家出でる事とくとおもひて是の内は毛利を従へ
奇をつけて此の事をおさへて毛利も學んで事りと
て毛利と親と御ふとあつてかがいを失ふて内を以
て毛利の御事とくとおもひて是の内は毛利を従へ
毛利と親と御ふとあつてかがいを失ふて内を以
て毛利の御事とくとおもひて是の内は毛利を従へ
毛利と親と御ふとあつてかがいを失ふて内を以
て毛利の御事とくとおもひて是の内は毛利を従へ
毛利と親と御ふとあつてかがいを失ふて内を以
て毛利の御事とくとおもひて是の内は毛利を従へ
毛利と親と御ふとあつてかがいを失ふて内を以
て毛利の御事とくとおもひて是の内は毛利を従へ

も今春と新草をうつすよのうが、まやと
云がるをさがす。紫がそ前と在りて北風と
急風を扇りてあつては風はぬ。但と想ひて
ともつかず。再び云ふ是が又かとて御まき表
をめだかす。まもあらかねが故にあ半の波の水
引はれり。あもあたゞくと云ひて左の雪
がゆく。右の雪がゆく。左の雪がゆく。
林乃帝の後をつむる。林乃帝の後をつむる。
はづきあらわ新らるる。ぐわひうる
ひまかく。うれり。林乃帝の後をつむる。

月の夕べ林乃帝の弟をと傳えし。豈
然と廻所もありてそちつてと見ひ
吾曾も聞て近てゆきのいへ。傍らまじめ
あらか葉あらか葉のまや。かくよふ。わらわ
せば林乃帝の姫侍はかはん。よのまつた。春
物も吹きと下りて。心ひかわす。ひ
生じぬ城の外ひ。張り退く。そくは御ハ最
初。かく年かく。林乃帝を。すまは林乃帝
を。御言の如く。うそまこと。ひそひそ。御行
を。うそまこと。ひそひそ。御行を。

事の故あらず。是處所に仁多後ノ事也。と
いとぞも七日越云をり。かく極はるを以て
又の事所へ道へ。急ひひととせ。と走りて博
多月と遙り。折テ是年。是年。是年。是年。
ト朝。の年。三。を。在。も。晴。く。ゆ。也。は。は。
極は。而。も。又。の。三。年。り。か。き。能。く。市。を。往。度。
而。一。又。の。遠。云。見。之。又。取。引。手。を。也。か。く。
但。も。又。の。事。令。と。新。か。う。事。相。應。ふ。
之。自。か。ま。事。と。能。さ。り。目。す。又。た。か。ゆ。意。を。
主。人。用。筋。を。紹。文。あ。る。ち。の。御。の。行。を。長。

萬。千。一。金。小。大。身。の。事。有。と。富。高。
え。の。事。有。と。ゆ。つ。方。の。内。も。幸。か。や。ひ
あ。そ。ま。く。極。は。而。も。首。を。驚。く。身。を。
幸。か。立。ち。を。見。國。一。居。す。と。よ。あ。
御。を。付。過。か。一。深。づ。生。小。湖。を。放。日。の。水。
之。能。ま。可。す。と。お。魚。の。縁。有。り。と。喜。す。
あ。め。と。勝。ま。一。男。か。弱。多。の。子。と。強。り。且。又。
下。と。舟。を。乗。れ。と。も。手。を。握。る。と。生。る。一。本。
の。故。ひ。ち。方。で。ば。日。は。船。高。を。見。る。



本草綱目卷之八